

慈照山蓮光寺所蔵資料の香川景樹

* 田中 仁

第一章 慈照山蓮光寺・理山

第一章 慈照山蓮光寺・理山

第二章 『理山日記』の景樹関係記事

第一節 紹介済み日記十六冊補遺

(一) 見落としていたもの

(二) 前稿ではとらなかつたもの

第二節 新出日記の景樹関係記事

第三章 蓮光寺所蔵資料の景樹関係記事

第一節 蓮光寺所蔵理山短冊補遺

(一) 前稿ではとらなかつたもの

(二) 新出短冊

第二節 『浮沈法』

第三節 『白隠和尚施行歌 追加真宗意施行歌』

第四節 『無尽蔵 卷二』

第五節 『遊心閣遺訓』

第六節 『東行日記』

(一) 明治七年一月六日

(二) 同年同月七日

(三) 同年同月八日

慈照山蓮光寺は滋賀県東近江市五個荘北町屋町（旧近江国神崎郡北町屋村）にある真宗佛光寺派の寺院である。創建の年次、開基とも未詳であるが、第十四代住職理山の記した「当院住持職相統」⁽¹⁾は、冒頭に「祐善法師」を置き、「当寺元天台宗之支流也」⁽²⁾と注記する。理山が十四代というのもこの祐善を初代としてのことである。理山は、『由緒書』（蓮光寺所蔵）においても、「当寺ハ祐善ト云人元和五年ニ草創アリテヨリ源智法師ニ至リテ漸々寺院メケルアリサマナリ」と、祐善を初代とする。ここにいえば中興としてあげられている源智法師は、「当院住持職相統」によれば第八代の住職で在職二十六年、宝永五年（一七〇八）十一月に没している。「蓮光寺」という寺名については、祐善法師から六代の「了意法師」のところに「寛文二壬寅年三月四日自本山大法主賜「御染筆蓮光寺号」とあり「コノ已前ヨリ蓮光寺ト称ス古キ過去帳ニミヘタリ」という注が付けられている。寛文二年は西暦一六六二年である。「当院住持職相統」や『由緒書』をみると、理山の代にはさらに詳細に由緒を考証すればすることのできる文書なり伝承なりが残っていたような気配も感じられるのであるが、「夫由緒書ニハ何レモ諸家コトクク何クノ末葉ナリ寺院ナラバ何々ノ御建立ナリトアラヌコトヲ引付テカクコト

ハ末葉ノタメニハ亘シカラヌコトナリ」(『由緒書』) というのが理山の考えであった。

理山は前記のように祐善からかぞえて十四代目の蓮光寺住職である。比較的詳しい伝記としては『近江人物志』、『近江神崎郡志稿』、『五個荘町史』第二巻近世・近代編^③がある。これらのうち、『近江神崎郡志稿』は「『理山日記』の香川景樹」(本誌第六巻第三号。以下「前稿」)に引用した。ここでは中でもっとも古い『近江人物志』の「三津理山」の項の全文を引用する。近世期の理山が詩歌にも堪能な優れた真宗佛光寺派学僧であったことがうかがわれよう。

三津理山 二四五九

理山、徳水と号し、又遊心閣と称す。神崎郡北町屋^{大福}蓮光寺の住職琢成の長子なり。寛政十一年五月二十一日を以て同寺に生まる。資性聡敏幼より学を好む。文化四年二月得度、翌年同寺第十四世住持となる。時に理山の伯父玄珠、野洲郡^{このほま}木浜光林寺に住し、宗字に精し、理山乃ち就て学ぶ。後京師海印寺の僧宜然に師事し、又天台の律師慧超に従学す。而して傍ら詩を中島棕隠に、歌を香川景樹に学び共に堂に入れり。人と為り謹厳にして気節あり、交はる所、多くは当時の俊傑にして、中にも頼山陽父子・後藤松蔭・貫名海屋等と水魚の交をなす。嘉永四年端月頼三樹三郎来り訪ふ。留別の詩に曰く

老僧小閣坐春風。日々幽心遊遠空。嗟我烟霞癖長在。雪鞋霜傘漫匆匆。鴨崖

羨君随意度春風。深谷幽鷺懷遠空。霜笠雪鞋何足嘆。人間無処不匆匆。理山

天保十三年命を受けて佛光寺門跡系譜を撰し、加陽宮に伺候す。僧階累進して法印大和尚に至る。明治十年一月二日寂す、

年七十九。川竝龍ヶ口に葬る。男良山、世を襲ぐ。著はず所、入出二門偈録・大経和讃録・二河譬文略弁・玄義十四行偈略解・教義十七題略解等あり。皆其の寺に蔵すといふ。(調書、三津忠山氏報)

付記。大正四年、師の遺詠を録して上梓せしもの「徳水余瀝」と称す。今其の中の二三を録す。

外国は君のかはらぬ国もなしわかすめらきは一すしにして

さく花に思ひ出てや白雪の故郷遠く帰るかりかね
方外之身猶是臣 皇風仏日与年新 勤王有意老無力

只喜恩波及万民 (甲子元旦)

少し補うなら、良山に住持を伝えて隠居したのは安政五年(一八五八)十月、法印大和尚(法印大僧都)に任叙されたのはそれより前、住職を譲った長男芳桂の夭折のため住職に復帰した嘉永三年(一八五〇)の翌年八月のことである^④。明治維新以降の理山は、明治二年八月に本山本講師に補せられたが、その後明治五年六月教部省教導職訓導に起用され、同六年三月権少講義、入寂前年の同九年五月には大講義と累進していった^⑤。また、知友として名を挙げられている人々のうち、頼三樹三郎との交遊については多少の資料が残っている^⑥が、山陽、松蔭、海屋については現在それがほとんどなく実態はよくわからない。

蓮光寺にはこの理山にかかわる種々の資料が伝えられている。

先にそれらのうち自筆の『理山日記』十六冊、同じく自筆の『由緒書』一冊、『万曆家内年鑑』書き入れ、和歌短冊そして大正二年に刊行された理山の詩歌集『徳水余瀝』の五点から、香川景樹にかかわる記述を抄出し、『理山日記』の香川景樹として本誌第六巻第三号に掲載した(「前稿」)。小稿はその補遺と、成稿後新たに見出された理山にかかわる資料から抄出した景樹にかかわ

る記述とを合わせたものである。

まず補遺について言うと、ここで行う補遺には、

①見落としていたもの

②前稿では採らなかつたもの

の二つがある。①は単純な見落として、『理山日記』に一例ある。②は、前稿の時点では景樹とかわらない可能性のほうが大きいと判断して取りあげなかつたが、その後判断を変えたもので、『理山日記』に一例、日記以外の蓮光寺所蔵資料のうち短冊に一例ある。

次に、前稿成稿後の新出資料は、冊子類としては「日記」⑦をふくめて九十七点、短冊は一〇五枚ある。短冊のうち一〇三枚が和歌である。冊子は蓮光寺現住三津孝昭氏によって新たに見出されたもので、この度格別のご厚意により見ることを得た。短冊の大部分は新出というより前稿の成稿後に見ることを得たというべきものである。

これらのうち「日記」に景樹にかかわる記事が一例ある。ただし景樹その人ではなく、長男の景恒と推定される「景周」にかかわるものである。日記以外では冊子六点到合計八例ある。ただし、そのうち二点は一方がもう一方を書写したものとと思われるので、実質は五点七例になる。そして短冊のなかに景樹追悼歌短冊が一枚ある。

以上の景樹関係記事を、日記とそれ以外とにわけて掲げると次のようになる。

(1) 日記の景樹関係記事

①見落としていたもの：一

②前稿では採らなかつたもの：一

③前稿以後新たに見出された年次の日記に見えるもの：一

(2) 日記以外の冊子の景樹関係記事

①見落としていたもの：〇

②前稿では採らなかつたもの：〇

③前稿以後新たに見出された資料に見えるもの：八(七)

(3) 短冊の景樹関係歌

①見落としていたもの：〇

②前稿では採らなかつたもの：一

③前稿以後新たに見出されたもの：一

これらのうち、景樹と理山との関係、より広く言えば桂園派と真宗佛光寺派との関係を考えるうえで、もつとも注目されるのは、(2)の③に属する『遊心閣遺訓』にみえる景樹に誤られた、という一見悔恨に似た述懐であろう。この述懐については、第三章「蓮光寺所蔵資料における景樹関係記事」の第五節に掲出して考察する。

そして、さらに調査を必要とするという意味で重要なのは、(1)の③に属する『弘化三年・四年日記』に書きとめられている「景周」の和歌と、(2)の③に属する『東行日記』の景樹関係記事であろう。前者については、第二章「理山日記」における景樹関係記事の第二節「新出日記の景樹関係記事」に記す。この「景周」が景恒なのかどうか、この歌につづいて詠者名を記されずに掲げられている十一首は「景周」の歌なのか、または理山の歌、またはほかの誰かの歌なのか、多少の考察を要する。後述のように「景周」は景恒であり十二首ともに景恒であることはほぼ確実だと思ふのであるが、もしそうではないとしたら現在のところ蓮光寺所蔵の理山にかかわる資料のなかに景恒と理山、近江との間に何らかの結びつきがあったことを示すものはなく、それはそれで景恒と理山との関係、広くは景樹没後の桂園派と佛光寺派、真宗との関係を考えるうえで重要なことではある。

後者の『東行日記』の景樹関係記事については、第三章の第六節に記す。『東行日記』は、明治十年に入寂した理山の、最晩年と云ってよい明治七年に著された旅日記様の著作である。罫紙六

枚百二十数行の小冊であるにもかかわらず、景樹にかかわる記事が三個所に見られる点がまず注目されるのであるが、このことを手がかりとして明治期における景樹歌論の享受について考えることができるかもしれないと思う。

このほか、『東行日記』の(一)明治七年一月六日には景樹門人河面重就の履歴の一端、同じ第三章の第三節『白隠和尚施行歌追加真宗意施行歌』には、天保七年十二月二十二日の団子の施行⁸⁾にかかわる資料となる記述もある。桂園派や和歌に範囲をかぎらないなら、『東行日記』の(一)には幕末維新期における真宗、佛光寺派の重大事にかかわる記述がふくまれている。

以上のような景樹関係記事を、冒頭に掲げた目次にしたがって、掲出し、それぞれについて簡単に説明や考察を付記していくことにする。抄出に際しては前稿に準じて次のような処置をほどこす。

- 一、抄出した記事の上に「(一)」でくくって通し番号を付ける。
- 一、景樹に直接かわる箇所、またはかわると推測される箇所傍線を付す。
- 一、景樹にかかわるかどうかも明瞭ではなく推測により抄出した場合は、番号の上に*をつけ、記事の後に景樹とかかわると推測される理由などを記す。
- 一、同一資料に複数の景樹関係記事がある場合、配列は所出順とする。
- 一、訂正、推敲されている場合は原則として訂正、推敲後の形にしたがう。
- 一、原則として新字を用いる。
- 一、私に句読点等を付さない。濁点は原本のままである。ただし、説明のための文中に一部分を引用する場合は、私に句読点、濁点等を加える。
- 一、改行は原則として従うが、諸事情により原本と異なる場合は改行の位置を/によって示す。

- 一、文字の大小の比率、配置は原本にならうが、原本における比率・配置を正確に表していない箇所も多い。
- 一、朱字はゴシック体を用いて示す。

第二章 『理山日記』の景樹関係記事補遺

『理山日記』の景樹関係記事補遺として、第一節に前稿ですで紹介した十六冊の『理山日記』について、前稿で見落としていた一例を(一)、前稿では採らなかつた一例を(二)として掲げる。そして第二節に、前稿の成稿後に見ることのできた新出の「日記」について記す。その中に景樹の名は見えないが、前記のように景恒と推定される「景周」の和歌が書きとめられている。

第一節 紹介済み日記十六冊補遺

* (一) 安政元年(一八五四)五月十一日

〇 十一日巳上刻使^三小僧赴^三金堂銀兵衛^一〔昨日植物恵投之礼也
贈^三扇面^三香川^三 涅槃^三 胡瓜^五 一〕/

* 前稿で見落としていた記事である。(一)は二行に分かち書きされ、「香川 涅槃」はその中でさらに二行に分かたれている。理山が単に「香川」という場合は景樹を意味していると推測して補遺としてここに掲げた。しかし、後に(二)新出日記における景樹関係記事⁹⁾で述べる景恒を、「今の香川」といった意味でこう呼んでいる可能性もある。「金堂銀兵衛」は金堂村(現東近江市五個荘金堂町)の外村銀兵衛で、『理山日記』にときおり名がでている。

* (一) 文政七年(一八二四)三月二十日

○二十日甲申晴近々博因子登京之由承^レ之

詠草属^レ之薄暮勸成飯^ル先十一日^{ヨリ}麻疹^ニテ里^ニ飯^リ

*前稿では景樹と無関係と判断して採らなかつた。これより七日前の三月十三日に、本山佛光寺御堂衆の恵岳^⑨から、恵岳自身は三日に左方に転任し、新発意輝丸が十五日に得度することが決まったとの手紙が届いたよしが記されているので、この「詠草」は左方転任、徳丸得度の賀歌と推測したのである。博因は近江国神埼郡川並村の佛光寺派寺院福応寺の第二十三代住職である。蓮光寺とは同じ郡内の同じ宗派の寺院として平生から密接な交流があったので、その上京に際して恵岳への賀歌を託すのは当然あり得ることであろう。もう一つ、この詠草は景樹へ届けるものではないと思つた理由は、博因の景樹との交流があまり密ではないように思われたことである。先代の博聞は、文化四年(一八〇七)四月頃に入門した古くからの景樹の門人であつた^⑩。その博聞が文政四年(一八二二)八月に没し、博因が跡を継ぎ天保七年(一八三六)四月まで在世した^⑪のであるが、その名は景樹「歌日記」に見えない。

しかし、小稿では次のように考えて、これを景樹にかかわる記述として補足した。

博因の景樹との交流があまり密ではないと思うのは、特に親しかった博聞と比較することであつて、博因一人を見れば決して粗ではない。この文政七年より少し後のことになるが『理山日記』によれば博因は次のように理山の歌会にも出席しているし、歌会を主催してもいた。

六日丙午和歌会初福応寺并川島与兵工恭辰

時子等来集

(文政十一年正月)

十一日。於福応寺歌^ノ会兼題^{兼題} 当座

二十首集会人数^予与善明寺

(文政十一年四月)

そして次のように、理山とともに景樹亭に赴いたこともある。

八日晨朝見^三讚州常福寺^一朝飯后訪^二同人于常楽寺^一

^{午膳中}福応寺上京同人并信行寺与^レ予三人到^三宗匠家^一

(天保三年五月)

博因が景樹に入門していたことを示す資料を私は見出すことができているが、その可能性は十分にある^⑫。

さらに、左方転任や嗣子の得度にかかわる賀の歌なら、「詠草」と表現するかどうか疑問でもある。賀の歌であることがもつと明瞭に分かる言い方をするのではないか。これは景樹に添削を求めて送る豎詠草か仮綴の詠草を言い、それを上京する博因に託して景樹に届けようとしているようにも考えられる。以上のような理由でこれを景樹に関わる記事の可能性があると判断してここに取り上げた。

第二節 新出日記の景樹関係記事

新出資料のうち二冊の「日記」がある。前記のようにこれらの中に景樹その人にかかわる記述は見られないが、弘化三年・四年(一八四六・一八四七)の日記をふくむ一冊に、景樹の長男で桂園を継いだ景恒の前名である「景周」という名が見られる個所がある。それを抄出しておく。景恒が本山佛光寺・佛光寺派とどのような交渉をもつたかという問題は、広くは桂園派の展開と佛

光寺派との関係、さらに広くは和歌と浄土真宗との関係にかかわる問題の一つにほかならない。この記事はそれを考えるための重要な手がかりになるかもしれない。

その前に、ここでこの二冊の「新出日記」は実は日記というのを躊躇せざるをえないものであることを記しておきたい。これら二冊は前稿で紹介した日記と同じ意味での「日記」というより次に記すように備忘録、雑録であって、その中に、一冊には弘化三年・四年、もう一冊には嘉永五年（一八五二）の日記がふくまれている、と言うべきかもしれない。そのことと「景周」の歌がかきとめられていることとの関係は、今のところよくわからない。たとえば、日記ではなく備忘録、雑録だったからこそかきとめられた、などと言えるかどうか疑問である。まして歌の解釈との関係はまったく見いだせないが、景樹にかかわる記事がどのような「日記」に見られないのか、また景恒にかかわる記事がどのような「日記」に載っているのか、いちおうは記しておくほうがよいように思う。

弘化三年・四年「日記」は表紙に外題やそれに類するものはなく、見返しに「寒中ニ平昆布三度 六月土用中ニふき三度 右食する時ハ悪疾悪瘡腫物ヲ煩ハズ」と記し、それを大きい×印を重ね書きして左に「俗説不足採用」と書き足している。もう一冊の嘉永五年日記は表紙左上に「嘉永壬子備忘」とあり、「備忘」の左に小字で「五年」と記されている。同じく表紙右端には「いか成ゆへか有けん」「いきなから死して」という二行があり、それぞれの右に小字で「此十一字ヲ以テ生涯他ノ非ライハサル真言ト思ヘシ」「此八字老者ノ守リトスヘシ」と記されている。そして見返しには「三州吉田札木町 本陣前 鋳屋半蔵 一閑張名人 二川本陣出生」とある。

巻頭には、弘化三年・四年の場合は、それぞれ、

弘化三歳次丙午日記并録見聞

遊心閣徳水良謙 俗年四十八

臈四十四

弘化四丁未日記

先照院理山良謙 俗年四十九

臈四十一

嘉永五年の場合は、

嘉永壬子五年備忘

法印理山 俗年五十四歳

僧臈四十六

と記されている。前稿に掲げた日記に類似しているが、それらの日記ではほとんどの場合「文政七歳次甲申日記」「天保十五甲辰年日記」「嘉永六癸丑日記」のように「日記」とある部分が、弘化三年は「日記并録見聞」、嘉永五年の場合は「并録見聞」「備忘」となっている点が若干異なっている¹³。寸法も、十六冊がだいたい縦二三糎前後から二四糎ほど、横一五、六糎前後で、中では小型の慶応四年（明治元年）年日記でも縦二一・六糎、横一五・二糎であるのに対して、第一冊が縦一七・二糎、横一二・二糎、第二冊は前三分の二ほどが縦一五・五糎、残りが一六・四糎、横一一・七糎しかない。

その内容も、特に第一冊は雑録の中に日記が埋もれている、といった印象をうける。元日、十九日の日記が巻頭に一丁あって、その次には『茶店弁説』からの抜き書き一丁、彦根元町弥五郎とその家族の手形判形一丁、法然・親鸞の流刑にかかわる記事の諸書からの抜き書き四丁半、仁孝天皇崩御一丁分等々の記事がつつ

き、次のはっきりした日記は第一二丁裏の十二月九日までとんでいる。以下二十三日、二十四日の二日間の日記があるが、次は「喉のはれたみて堪ざる時」の薬の製法、葛根湯の製法が記されて、弘化四年の日記になる。

弘化四年の日記は、前記のように冒頭に、「弘化四丁未日記 先照院理山良謙（俗年四十九 膺四十一）」とあって日記の体裁を整えているが、前表紙・後表紙をのぞいて七十八丁のうち日記の記事は元日、十九日、二十六日合わせて二丁半ほど 以下三十七丁半、貝原益軒『養生訓』の抜き書きと内容の要約がつづく。次いで二月六日の日記半丁、「御本山正月御規式之略記」四丁、喉痛と薬用のこと一丁、「御門主御着用之順次」二丁半、十五日（二月か）、二月二十五日、同二十九日の日記二丁分、「宛名高下之事」一丁分、次からは天地が逆になっており、最終丁（第七十八丁）からはじまって、主に漢詩、和歌にかかわる抜き書き、聞書が十二丁ある。

これと比べると第二冊の嘉永五年は比較的日記に近い内容を有するが、それでもやはり「日記」というにはためらわれるところがある。大まかな分野と丁数をはじめから順に記すなら次のようになる。

日記（正月元日～二月十七日）	四丁半
茶道	二丁半
日記（二月十八日～閏二月四日）	二丁
有職（貞丈雑記抜き書き）	八丁半
日記（閏二月二十八日、三月七日）	半丁
茶道	一四丁
日記（月末詳二十日～二十九日）	一丁
茶道	七丁
仏学	一四丁半
日記（九月一日～四日）	半丁

日記（十月八日～十二月六日）

六丁

茶道

一丁

『理山日記』の成立の経緯をこれら二冊の newly 「日記」にもとづいて次のように考えることも可能である。理山の手元の冊子に日記と備忘録、雑録を書きとどめていた、そうした冊子は同時期に何冊かあって、そのつどたまたま手にしたものに記したため、各冊の日記的記述は月日がとびとびになっている。前稿で紹介した十六冊のような日記は、それらを抄出してまとめたものではないか。弘化三年・四年も嘉永五年も前稿の十六冊にはふくまれていないが、それはこれらの年は何らかの事情で日記を編集しなかったためである――。

しかし、十六冊の年次と重なり、かつ日記と備忘録・雑録とが入り混じっている冊子は見られないし、弘化三年・四年、嘉永五年のこれ以外の月日のことを記した同種の冊子も見られない。そうである以上、これら二冊は日記の素材になるはずのものだったとも言いが切れない。日記がとびとびなのは単にそれだけしか書かなかったためかもしれない。『理山日記』の成立事情について考えるためには、蓮光寺所蔵資料のさらなる調査が必要であろうが、ともあれここではこれら二冊をいちおう『弘化三年・四年日記』『嘉永五年日記』と呼ぶことにする。

さて、新出の二冊の「日記」すなわち『弘化三年・四年日記』『嘉永五年日記』に、前記のように景樹その人にかかわる記述は見えない。ただし、前者の冊子の後ろから天地を逆にして主に漢詩、和歌にかかわる抜き書き、聞書が置かれており、その中に次のような「景周」の歌がある。

社頭祓 景周
 しらゆふをよる浪にして風の杜
 よとまん罪もふきや流さん

そしてさらにつづいて、詠者名のない歌が十一首掲げられている。二首目の第一句「きてみれ」はもとのままである。「きてみれは」の「は」の誤脱かと思われる。

水辺鶉

水寒きいりえのをはな吹かせの
みにしむ秋をうつら鳴也

各行見菽

きてみれ野は秋はきのから錦
一むらことにひともつとへり

新樹 景形翁一週忌

郭公鳴ねもかゝるしらかしの
みつ枝たをりて君にたむけん

遅桜

たつね入玉さか山のおそさくら
見し初花におくれさりけり

月前松風

心あらんこゝろつくしにもる月の
このま吹わくる松のあらしは

霰驚夢

さめて後音もなこりもなかりけり
降玉あられ手枕の夢

郭公

千磐破そのかみ山のほとゝきす
けふはあふひをかけつとや鳴

芋丈ぬしと共につくまの社

にまうて、
いにしへのつくまをとめのゆかりあれば
をりてそかへる藤浪の花

雲雀

子をおもふ雲ゐのひはりす、しろの
はなの上にやこゝろおくらん

花交松

えたかはす花の散をやいたはりて
松にのみ吹あらしなるらん

秋鳥

穂蓼ちるかはへのやとの庭たゝき
あき行水の声もすみ筒

第一首に記されている詠者名の「景周」は前記のように桂園を嗣いだ景恒の前名で、つづく十一首の詠者も景恒と推定される。理由の一つは、このように歌が列記される場合、詠者名が記されていない歌はふつうその前の歌の詠者の歌ということになるということである。しかし、この場合は歌集ではなく、前述のような「日記」に書き付けられたものである。同じ法則があてはまるかどうか疑問であって、それだけでは十二首ともに景周の詠とは言にくい。もう一つ、より確実な根拠としては、これら十二首のうち五首は次のように『桂園秘稿』『香川景恒遺稿』¹⁴⁾に載る景恒詠と一致しているということがある。②は第二首を示し以下これに準ずる。「遺稿」は『香川景恒遺稿』、「秘稿」は『桂園秘稿』である。

②水寒き 「秘稿」忠友判六番歌結第四番右

⑤たつね入 「遺稿」香川景恒大人和歌 天保十三年

同 新嘗祭之夜当座探題三十首 景樹点

「秘稿」新嘗祭之夜当座探題三十首

⑥心あらん 「遺稿」嘉永二年八月¹⁵⁾

⑦さめて後 「秘稿」天保十二年新嘗祭徹夜当座和歌二十首

⑫穂蓼ちる 同 景周二葉集

このように景恒の歌が並んでいながら詠者名を記さずに他人の歌をおくことは、たとえ備忘録・雑録であっても、またたとえ理山自身の歌であってもしないのではないかと思う¹⁶。

しかし、ここにこのように景恒の歌が十二首もまとめて書き付けられているのはなぜなのかわからない。理山関係資料に景恒の歌は見られないし名が出てくることも少ない¹⁷。本山佛光寺における景恒の位置づけも、景樹の後継者であるにもかかわらずけつして高くはなかった¹⁸。それにもかかわらずここに突然まとめて景恒詠がかきとめられている理由がわからないのである。

一つ考えられるのは、次に記す第四首の有川景形追悼歌が、景恒と景形との間に直接の交流があったのではなく理山を通じて景恒に依頼されたものであって、それをきっかけに景恒の歌への興味が生じたのかもしれないということである。

第四首の題に添えられている「景形翁一周忌」の「景形」は、有川景形（安永九年・一七八〇生、弘化二年・一八四五没）かと思われる。有川景形については、『鳩のうみ』（吉田虎之助編集・発行 昭和三年一二月）雑の部に、「ほと、きす君かむかしをかたるにも知らぬ我さへ袖そぬれける」という歌が収録され、次のような略伝が付されている。

坂田郡鳥居本村の人、安永九年二月岩根藤五郎の長男に生れ、有川市郎兵衛の婿養子となる、有川家は神教九本舗の分家にて有名の旧家なり、幼名喜蔵、通称喜内貝廬庵の号あり、葉舗の傍国学を修め和歌を好む、黄中並に景樹の門に入り村田泰足、小原君雄等と交、弘化二年四月二十一日歿す。

野津基明『彦根歌人伝鶴巻』によれば号は「田廬」¹⁹、景恒に就いたとの記述はなく、景樹の教えを受けたのは「若時」という。ちなみに『理山日記』にしばしば名が見える市田時子²⁰につき『彦

根歌人伝寿巻』に「有川景形共友タリ」とある。佛光寺派門徒ではないが景形も「佛光寺派交流圏」の一員であるとみなしてよいであろう。

もう一人名が見える第九首詞書の「芋丈」は未詳であるが、川野正博『日本古典作者事典』²¹に次のような「芋丈」が出ている。

芋丈（うじょう、市田いちだ、芋々園）？？？ 近江俳人
蒼虬門、「蒼虬追善」をりそへ集」編

近江の人であること、編集した書が一八四五年（弘化二年）に刊行されていること、そしてさらに北町屋村の蓮光寺門下に市田家があり、『彦根歌人伝寿巻』『名家伝記資料集成』ほかに載る市田義輔、市田義親等がその家から出ていると思われること²²から、「芋丈」はこの蒼虬門の近江の俳人市田芋丈かと推測される。景恒の俳人との交流の例としては、『香川景恒遺稿』に、

友なる芹舎翁か家集の世にあらはれたるを歎ひて
はせをはのものと雫し清ければ今猶末の露も濁らず

とあって²³、成田蒼虬門の八木芹舎と親しかったことがうかがわれる。その縁で芋丈とも交流があったのではないかと思われるが、理山を仲立ちとしての交流だったのかもしれないし、両方が重なっていたのかもしれない。これら景恒と景形、芋丈との関係は前記のように景恒と理山、広くは景樹没後の桂園派と佛光寺派、真宗との関係を考えるうえで重要な問題だと思われるのでここに記しておいた。

第三章 蓮光寺所蔵資料における景樹関係記事

まず第一節に前稿の「三 蓮光寺所蔵資料の香川景樹」の補遺として短冊を、次の第二節以下に新出資料における景樹関係記事を、推定成立年次順に掲げる。

第一節 蓮光寺所蔵理山短冊

*〔一〕

さく花も世になき君かおもかけも

みまくのほしき比にはなりぬ

理山

*蓮光寺を初めて訪問した二〇〇七年八月に、景樹追悼の歌として現住三津孝昭氏より示された短冊である。前稿では二つの理由でこれを取りあげなかった。一つは、たしかに春に没した人を追悼する歌ではあるが、詞書や題そのほかの、その人を景樹と特定する根拠となるものがないということである。そしてもう一つは、「さく花」を「みまくのほしき頃」になった、というのは、景樹の忌日である三月二十七日という春も終わりに近い時期にそぐわないということである。しかし、一点目については、だからといって景樹ではないとも言えないし、二点目については、追悼歌を詠むのは忌日に限らず、忌日に詠んだとしなければ景樹追悼の歌である可能性もある。以上のように考え直してここに掲げることにした。

〔二〕

寄花

根にかへる花はやかても咲らめと

懐旧

きみか御影は見るよしもなし

理山

*二〇一〇年一月に新たに見ることを得た理山の和歌短冊一〇三枚のうち一枚で、景樹三十三回忌の追悼歌である。これとは別に、その由を詞書に記した同一歌の短冊が蓮光寺に所蔵されている（前稿第三章第四節〔一〕）。

第二節 『浮沈法』

〔一〕

景樹

おのか見ぬ

はなほと、きす

月雪を

四の緒

にこそ

引移しけれ

*『浮沈法』は、書の基本の一つである筆の浮沈を身につけるための教本で、縦二四・五種、横一七・四種ほど、前後の表紙をのぞくと四丁の小冊子である。その後表紙にこの歌が記されている。行分け、文字の配置はおおまかではあるが元の形ならつた。景樹の色紙を筆跡もまねて写したものと推測される。筆者は未詳である。通常の理山の筆跡とは異なるが、前記のように景樹の色紙を真似たと推測されるので、直ちに理山の筆ではないともいえない。

この歌は、「歌日記」文政十年一月に、「来章 応震 蘆洲 蘆鳳なときたりて画かく賛す」として列記された七首の第三首として次のようにある。

ひはほうし

おのか見ぬ花ほと、きす月ゆきをよつの緒にこそ引うつしけれ

「四の緒」とは弦楽器の四本の弦の意であつて、この歌がなせ書の教本の後表紙に書かれているのかわからないが、『理山日記』天保五年三月六日に、「於臨淵社稽古^ス浮沈法^ヲ」とある（前稿第二節（七九））のと、何らかの関係があるかもしれない。たとえば、これはこのときの稽古に用いられた本で、その際たまたま目にした景樹色紙を写した、といったようなことも考えられる。

第三節 『白隠和尚施行歌 追加真宗意施行歌』

(一)

こはいにしへの飢饉^{きん}のとき世に

行はせ玉ふを此度^{このたび}同志の人々^{おなじひとら}

に与ふるなり 故肥後守平景樹大人詠

飢人に頓てあたへんたのしきは

わか袖^{そで}にこそまづつ、みけれ

*理山筆、縦二五・二種、横一七・三種ほどの仮綴冊子一冊、内容は前半に「白隠和尚施行歌」、後半に「真宗意施行歌」と、二つの施行歌を併せたものである。この「白隠和尚施行歌」は、小野恭靖氏「白隠慧鶴『施行歌』研究序説」²⁴⁾という第Ⅲ類と近い。大きい違いは、こちらの「白隠和尚施行歌」が第Ⅲ類の第一〇〇句「朝はけんくわをせし人が」、第一〇一句「暮に頓死をするも有」を欠く一八句からなる、という点である。「真宗意施行歌」は、「天保七年申年十二月」という日付から天保飢饉の時に作られたものと推測される。後に改行、ふりがな、濁点ともとのままに

全文を引いておく。作者は未詳であるが、理山であったとしたら景樹の添削を受けている可能性もある。

ここに掲出した「こはいにしへの」以下は、「白隠和尚施行歌」のすぐ後、「真宗意施行歌」のすぐ前におかれている理山の記述である。したがって、「こはいにしへの飢饉のとき」の「こ」は「白隠和尚施行歌」をさす。「いにしへ」は、「白隠和尚施行歌」の伝本中、序文に「貞享の初め。凶作飢饉の事あり。駿州不二の山下。原の駅松蔭寺の大善知識白隠惠鶴禪師此鄙歌をつくりて。遠近の老若幼童に諷はせ富家の志しを起して。大に苦民の飢を救ひ玉ふ」という一節をふくむものがある²⁵⁾ので、それをふまえて貞享（一六八四〜一六八七）の初め頃をさしていると推測される。「此度」は「真宗意施行歌」の後ろに記されている日付の「天保七年申十二月」、いわゆる天保飢饉のさなか理山が景樹から教えられた製法によつてつくった団子を施行した際のことであろう。「飢人に」の景樹詠は景樹「歌日記」天保七年（月日未詳）におさめられている²⁶⁾。『理山日記』には記されていないが、その際、このような歌もつくっていたのである。

そして、「真宗意施行歌」の後ろに「ことし慶応二年諸物価払底して天保度にも勝れり」とあるのによれば慶応二年（一八六六）に、再度「白隠和尚施行歌」・「真宗意施行歌」を施行したのである。団子あるいはそれにかわるものはこの度はどうであったのか未詳である。

「真宗意施行歌」

是^{これ}はいにしへか、れたる 白隠和尚の施行歌^{はくおんわしやうのせげうた}
 わか宗門の流れにも た、に自力と捨まいず^{じりきとすてまいず}
 この一生に聞法し 順次に浄土に生るへし^{いっしょうにもんぽうしじゆんじにじゆん土にうまへし}
 兆載永劫の御修行も か、る功德ハ猶おるか^{てうざいえいせうのごけうぎやうもか、るこうとくハなほおるか}

身をも命も惜まらずに 我等に替る弥陀の恩
 師匠知識の報恩に 身命をしむいはれなし
 身命すてずなる事ハ やすき事そとおもひ立
 早く今年の飢人を 救ふ心をおこすへし
 人間わずかに五十年 それも余生は何年ぞ
 今日にやあらん明日やらん なからへるともよしやよし
 いつれ五年か十年の 命の内の御報謝に
 一生二生又三生 四生五生無量生
 永生修行するかはり 未来永劫三途まで
 苦患を受るその替り いつれの道をおもふとも
 せめて此世に有ほとハ なるへき事ハいたすへし
 こゝに善者のたとへ有 火罪に逢を助りて
 灸をすゑよといはれなハ いやとはたれもおもふまし
 火罪ハ恥をさらす也 灸ハ此身の養生よ
 邪見ハ地獄で火罪也 報謝ハ邪見の養生よ
 これをおもは、善と悪 悪に随ふいはれなし
 天保七年申十二月
 ことし慶応二年諸物価払底して天保度にも
 勝れりよつて諸法方福有の人々にまうす飢饉寒
 苦の輩を縁に随ひ求ても施しこれあらはいよゝ
 倍増の福利を得て長久ならん事疑なし
 といふ 徳水僧都しるす

なお、前記のように蓮光寺所蔵資料のなかにこれを書写したと
 思われる一冊（以下書写本）がある。書写者、書写時期に関する
 記述は書中に見えないが、理山の筆跡ではないことは明らかであ
 る。両者の間には写真1に見られるような罫が書写本にはないと
 いう外見上の大きい相違があるが、本文の実質的な相違は、右に
 引用したうち「ことし慶応二年」以下の後書きの三行目「輩を」

が書写本では「輩に」となっていることのみであり、そのほかは
 仮名遣い、振り仮名等にわずかな相違があるにすぎない。外題も
 同じく『白隠和尚施行歌 追加真宗意施行歌』、表紙右端に「運心
 不朽称之為布輟己惠人故名曰施」（送りがな、返り点省略）とい
 う一行がある点も同じである。推測をめぐらすなら、慶応二年の
 「白隠和尚施行歌」・「真宗意施行歌」施行は、板行して配る、す
 なわち印施するといふほど大がかりで準備に時間を要し経費もか
 さむようなことではなく、主だった門徒に写させて配る、あるいは
 写させること自体が施行になるという方法をとった、そして何
 らかの事情でそのうちの一部が蓮光寺に残ったのが、前記の書写
 本なのではなからうか。

第四節 『無尽蔵 巻二』

〔一〕

二百五章

八坂塔ノ寺号ヲ雲居寺ト云ヘリト阿弥陀ハ今ハ寺町ニアリト云
 瞻西ハ諸神本懐集三井寺ノ下ニ但信念仏ノ行者也ト云ヘリ

〔欄外〕

「香川景樹云東山ノ雲居寺ハ今丸山ノ地ニシテ当時ノ額ハ今ハ
 源阿弥ニ存在ス／ト云ヘリ

* 『無尽蔵』は二箇所を紙縫で綴じられた、縦二四・七糎、横
 一七・三糎ほどの冊子で、筆者は筆跡からみて全編理山である。
 前表紙・後表紙と次に記す二之巻の扉には野のない紙が用いられ、
 本文は片面一〇行の罫紙が用いられている。書名は表紙左上に直
 書きで「無尽蔵」とあり、その下に「遊心閣録」とある。表紙右
 上には書名より大きく「第八」、そのすぐ下に二行にわけて「対
 食偈科 安心論題」と記されている。「対食偈科」「安心論題」は

書中にこれらがふくまれている旨の覚え書きであろうが、「第八」の意味するところはわからない²⁷。前半の三七丁は扉もなく巻数の表示もない。第三八丁左上に「无尽藏二之巻」とだけ記されており、以下それをふくめて四八丁、ただしそのうち後ろ二丁は白紙である。全編主に真宗、佛光寺派にかかわる著書、文書の抜き書きや写しで占められ、ところどころに理山自身の覚え書き等が書きとめられている。

巻之二の四八丁半のうち前半の二六丁半は『蓮如上人御一代記聞書』の注釈である。注釈者が誰なのか、私にはわからない。所々に章の全文または一部分が朱で書かれている部分があり、二百五章は全文が朱であるが、墨と朱とがどのような基準で使い分けられているのかもわからない。いくつかの章の上部欄外に理山によると思われる少数の簡単な注記があつて、これはその一つである。雲居寺は「拾遺名所図会」に「雲居寺旧蹟」として掲載されているが、額に関する記述はない。源阿弥は景樹「歌日記」天保六年（一八三五）に次のように一度だけ出てくる。

円山、君が長崎なるを爰にうつして見るや此九重なるをかしこにうつさんや此高殿に肘うたけしてうたけやりてむ

ひさかたのくもゐに匂ふ黛は二日の付きのふたつなき影

天保六年の葉月源阿弥につとひて高野興善子へ酔のまといにかい付て参らすなむ²⁸

この天保六年という年次が注目される。『无尽藏』の中に見える理山在世中のもっとも古い年次は文化八年（一八一二）、もっとも新しい年次は、天保十二年（一八四二）である。一之巻には、所出順にかかげると文政五年、文化八年、天保二年、文政六年、文政八年といった年号がみえる。『蓮如上人御一代記聞書』は二

之巻巻頭におかれているがその中にも欄外の書き入れにも年次記載はなく、二之巻に見える理山在世中の年次は、その後ろにいくつか見える随応上人、随念上人の勸章の年次で、所出順にかかげると文政六年、天保七年、天保八年、天保八年、天保九年、天保五年、天保九年、天保十一年、そして天保十二年となる。このような年次からみて、「香川景樹云」のこの書き入れは、おそらく景樹生前に行われたものであつて、「歌日記」に源阿弥の出ている天保六年のころである可能性もある。天保後半頃以降の理山の景樹評価が単純明快ではないことは次の「第五節『遊心閣遺訓』」で述べるとおりであつて、この「香川景樹云」がその時期の書き入れであるとしたら、理山がどのような経緯でこれを知ったのか興味深いのであるが、現時点では経緯不明と言わざるをえない。参考までに『蓮如上人御一代記聞書』、『諸神本懐集』の該当部分を掲げておく。

一、有人〔瞻西上人のことなり〕「撰取不捨のことほりをしりたき」と、雲居寺の阿弥陀に祈誓ありければ、夢に阿弥陀の今の人の袖をとらへたまふに、にげけれどもしかととらへて、はなしたまはず。撰取と云は、にぐる者をとらへて、をきたまふやうなること、こゝにて思付けり。是を引言ひきもとに仰られ候。
（蓮如上人御一代記聞書）²⁹

カノ炎上ノトキ菩提心ヲオコシタリケンヒトハイツレノ法ヲカ行シケン、オホツカナシトイヘトモ、諸教ニホムルトコロオホク弥陀ニアリ、サタメテ西方ヲネカフトモカラオホカリケン、シタカヒテ東山雲居寺ノ本願瞻西上人ハソノトキ発心ノヒトナリ、カレストニ但心念仏ノ行者ナリ、カルカユヘニオホクハ西方ノ行人カトオホユ。
（諸神本懐集）³⁰

第五節 『遊心閣遺訓』

〔一〕

一 学問の事誰もくいふ事なれとも其身くの時と処と

位との差別あるへし時処位之事ハ熊沢了介か集

義和書并外書ニ詳悉せり今此寺に住持たる身の

老僧もなく十四五才にして当住たらハ迎もく諸国偏

歴遊学の時にあらず諸国遠境の僧の学に勇

なるものも辺境なるゆへ也我この土地この処に寺務

たるハ天の命する処にしてしかも辺境の人みな京都

に輻湊すれハほどく京都にすこしく学ふ時は

しらるゝもの也扱八宗の大綱ハ心得へき事也といへ

とも又其門に入て一宗くを窮むへきにもあらず寺^三

山^嶽ハ寺山の天台にして吾取処にあらず唯識ハ彼

宗の唯識にして我とる処ニあらずわか取処ハ浄土

真宗にして其余の宗綱ハ少しく心得るまで也其心得る

迄の学問に日子を費して窮むへき宗乗を窮

すんは有へからず其窮むへき宗乗すら少年より寺役

に拘りて窮めかたし何況や余宗に経歴せんや

諸宗猶余り況や遊芸をやこれも心得置たし

くくと楽にたつさはり鞠に赴き茶湯に手を伸

し侍るとも迎もく此寺に住持たるもの、成へき事ニ

あらずよし成へしとも諸宗をさへ学せざるもの、宗

乗に暇ありといふにも非ずしてなすへき事に非ず

とおもふへし

付^子龍笛を習へり辻左近将監高峯の門人也^{能登に}

いふ楽ハ唱明に便なるものゆへ音声のため調子を

知たにもならぬへし又導師たらん時音楽何

の曲ともしらぬハ都合なるゆへ可習とおもへり

京へ十三里を隔て時々上京する時習処ハ一二

曲持參の菓子料又ハ二季の礼金等学ふ曲数に

かそふれハ一曲か金百疋にもなれり及ハぬ事とおも

ひて止たり

茶ハ当寺煎茶流行といへとも又茶道も大に行

ハれて晴々しき処にてハ迷惑すへしとおもひ学

たくハおもへとも宗匠たる人には付すして過た

り不知とも各別迷惑もなかりしるとも相伴に

て呑ミやうたに心得たらハ事足へし況や茶

ハ名誉のものにもあらず皆是失徳の人の始し事

也悟窓漫筆にも伸たり見るへし利休も古田も小室も

身の終り目出度には非ず余れとも世上流行の事

ならハ咎むへからず呑やう施てあらく手前を

下手なから覚へたらハ事足へし好むへからず

又煎茶も世人の応接までに飽なるを少し

用ゆへし好むへからず多は留飲の病となる

歌ハ香川景樹の門人也此宗匠実^一世の

大俊哲にして従学のもの大ニ志を立るものも

多かりき余れとも夫さへ我ハあやまられたり

宗匠のあやまり有にあらず彼ハ歌の宗匠也我ハ

真宗の僧徒也兎角我門にあらざるものハ有害

もの也と心得へし

詩ハ先師蔡華法師好給へり十三四才より作り

始て十八九才の比中島棕隠先生の門に入れり

余れとも廿三才の春より歌になりて詩ハ廢

せり余れとも童子ハ詩を学ふときハ文字を

よく使ひ覚ゆる間作り習ふへし但しわれ儒

者にもあらず真宗の僧侶也と存して詩に

耽りて家学怠るへからず

*「歌ハ」の段を写真2として後ろに掲げた。『遊心閣遺訓』は縦二四・五糎、横一七・二糎、前表紙・後表紙をのぞき本文二五丁、「遊心閣」すなわち理山が蓮光寺の後継者である良山のために、地方の真宗佛光寺派寺院の住職として心得ておくべきことどもを微に入り細にわたって書き記した教訓書で、理山の自筆である。「遺訓」とは、父が子に、いづれ自分の後を継いだ時のために与える訓戒といった意味であろう。

卷末には次のような二つの理山の奥書がある。どちらも良山が得度して蓮光寺の次の住職予定者になったことにかかわるものであるが、良山の得度は、『万曆家内年鑑』書き入れ、佛光寺『御日記』⁽³¹⁾ほかによれば安政二年（一八五五）二月十五日で、良山はこの時まだ十一歳であった。

此書ハおもひ出るまゝに当寺に住持たらん
こゝろ構へをかいしるすもの也書改るも多
かめれと其いとまを得ず捨て置てハ
反古たらんも無下也とて冊子とハなし
たる也

安政二年五月日 理山翁五十七歳 丸墨印

良山童子へ

急かぬ得度もことしハ時を得てすみ侍り
難からんとおもふハやすく易からんと
おもふまたやすからざるあるハこれ
大やう世中のさま成へし寺務する事
のかたきをしらハおのつから生涯
易き事も在なんかとしるし侍る也
安政二年

五月 遊心翁□（書き判）○（丸墨印）

冒頭に掲出したのは『遊心閣遺訓』第三条の「学問の事」と「付」としてそれに添えられている「楽」「茶」「歌」「詩」の四項目とである。景樹への言及の解釈にかかわるところがあるので、巻頭の一段も掲げておく。

一吾ハ此寺を持てこの寺の且家を教導の為に

此寺へ生れ来りたるもの也とおもひて外へ心を移

すへからず此寺より外二よき寺ハ有へからずと

片付て勤行すへき事

付木にても草にても種替る時ハいたむもの也又

ふと枯るゝ事も有もの也理山少年のときより

大なる志有て此地を捨て天晴一世に行はるへ

しとおもへり然れともみなあやまり也迎もく

地を替る事は悪しと思ひ切て生立の俣にて

有へき事身の為親のため又ハ先々祖々の御

為也とおもひ其中とりわき身の為なるもの也

ほかに「辛酉加之」「辛酉増補」と頭書された増補が二ヶ所あって、辛酉年すなわち文久元年（一八六一）に催された親鸞六百回忌の大会において「肝煎」を勤めた経験にもとづいて、本山との応対において心がけるべきことが縷々述べられている。

掲出部分に登場する人物のうち、龍笛の項の辻左近将監高峯は宮廷楽所の楽人で、三上景文編『地下家伝』によれば、寛政元年（一七八九）生、嘉永三年（一八五一）没。能登守には天保四年（一八三三）正月に任じられている⁽³²⁾。本山佛光寺に「御館入」として出入りしていた⁽³³⁾ことから理山との縁が生じたのである。同じく詩の項の蔡華法師は理山の父で文政三年（一八二〇）

に入寂した蓮光寺第十三代住職の琢成である⁽³⁴⁾。

さて、この度新出の資料における景樹関係記事のうち、もっとも重要な意味をもつのが、「我ハあやまられたり」（景樹によって道を誤った）という断言であろう。具体的にはどのように誤られたのか記されていないが、この一句のみを見ると、誤った考えを吹き込まれたというような、いわば思想上のことともとれる。しかし、理山の真意はおそらくそこにはない。

理山は、「此宗匠実^ニに一世の大俊哲にして従学のもの大ニ志を立るものも多かりき」と、思想家・教育者としての景樹がきわめて優れた人物であったことを認める。そのうえで、しかし自分はそのような大俊哲に導かれながら道を誤ったと言う。これは、景樹の所論の否定ではない。景樹の所論に誤りがあるわけではない、要するに「真宗の僧徒」としては「歌の宗匠」たる景樹に随って身を処することはできないのだと、理山は言っているのである。

景樹に随って身を処する、と言えはいかにも大仰で、真宗の僧徒にできることではないのことはさら言ってもないかのようである。しかし、たとえばかつて理山は本山佛光寺の家司である小幡徳義の「薄情」による憤懣を、景樹の談話を思い出して「四時者天地之禍福而禍福者人之陰陽也」として鎮めようとした⁽³⁵⁾し、「善徳寺就^ニ養父ノ事^一数箇有話。為^ニ説得ノ憶^一大人ノ話」ともいう⁽³⁶⁾。「大人」は景樹である。「真宗の僧徒」に徹するならばちらの場合も景樹ではなく親鸞なり佛光寺第七代了源上人なりの教えや逸話を想起すべきところであろう。こうした景樹への傾倒は、終日景樹宅で過^シし本山の重要な法務を欠席する⁽³⁷⁾という、末寺住職としては許されない事態を引きおこしてしまう。時間軸に沿って言い直すなら、そのような事態を引きおこしながら、なお理山は景樹の所論にしたがって現実を認識し、対処しようとするをやめていない。

理山が良山に伝えたかったことは、末寺の住職としてはこのよ

うなことはあつてはならないということである。この項のはじめに引用したように、和歌についての教訓は学問の付けたりとして「龍笛」「茶」「煎茶」「詩」と並べられているのであるが、その「学問」についての教訓の中で、「今此寺に住持たる身」「我この土地この処に寺務たる」「此寺に住持たるもの」と蓮光寺住職であることをよくよく肝に銘ずべきことを繰り返している。巻頭にはすでに引いたように、「吾ハ此寺を持ってこの寺の旦家を教導の爲に此寺へ生れ来りたるものとおもひて外へ心を移すべからず」とあつた。住職として寺を維持していくためには何が必要なのかを理山は伝えたいのである。

理山は、天保八年に住職を長子の芳桂に譲って隠居し「遊心閣」という隠居号を得たが、その後も前住、隠居として蓮光寺の寺務、運営に深くかかわる一方で、同一二年閏正月には学僧として助講師の下の上首に、さらに五月には門主随念上人に散善義を講じて助講師に任ぜられ、同一三年三月には「桂宮御尋問」により随念上人に命じられて『佛光寺御門跡略々系図』を編んだ。さらに同年四月には八幡御坊（八幡別院）で六字釈義を講釈、弘化元年五月に門主に二河譬文を講じ、同六月副講師に任ぜられるなど、本山において学僧として重用されるようになっていった。

ところが嘉永三年六月に芳桂が没して住職に再任、翌四年八月には権大僧都に任じられる。そしてこの安政二年二月に三男忠磨（忠千代）が得度して法名良山を得たのである。ただし住職は引き続き理山が務めた。良山は前記のようにこの時まだ十一歳で、住職としての務めをじゅうぶんに果たすことは無理と判断したためであろう。「今此寺に住持たる身の老僧もなく十四五才にして当住たらば迎もく諸国偏歴遊学の時にあらず」とあるところから推測すると、いくら早くとも十四五歳にならないと住職は無理、というのが理山の考えだったのでないかと思われる。理山が再度隠居したのは三年後の同五年、良山十四歳のときである。

この『遊心閣遺訓』が書かれた安政二年という年は、まだ若い良山を蓮光寺の後嗣にするために心を碎かなければならなかった時期にあたる。『遊心閣遺訓』はそうした理山の思いの表れであったことは、二つの後書きや巻頭の一段落から容易にくみ取ることができる。

理山の景樹否定は、こうした当時理山の置かれていた状況を考慮して読まねばならないであろう。良山が住職として蓮光寺を維持していくために必要なのは何なのか、という立場から万事が評価されていると考えられる。良山のためには、傾倒した景樹でさえも「害有もの」と切り捨てざるをえないのである。

ただし、理山が終始一貫して景樹の所論を全面的に肯定し、その思想を受け入れながら、住職としての職務をはたすためにしてそれを棚上げして否定して見せている、というわけではなさそうである。理山の景樹への傾倒ぶりは、たしかに『理山日記』に頻出する景樹関係記事から十分にかがうことができる。しかし、天保七年（一八三六）十二月二十二日の団子の施行の記事について、

今日^{午時} 広福寺之便此施行旨趣従来教育ノ恩并今度、
団子等為^三礼答^一贈^三香川大人^一於^二一書^一

とあるのを最後に景樹との交流の記事は突然とだえ、景樹はこの後天保十四年までは在世するにもかかわらず、登場するのは天保十年日記の後表紙に書き付けられた「吉野桜本坊快存」の注記として「香川門人也」とあるのと、安政元年（一八五四）に、平田大学（篤胤）が国元へ押し籠めになったことを記し、「先年在京之節^予香川景樹大人、同道遙遙会^二面^于四條街^一」と景樹との京都四条の称揚を過去の体験として記しているのと二回だけであって、しかもどちらとも景樹を中心とする記述ではない。

天保七年という年は、前記のように理山が蓮光寺の住職を芳桂に譲る前年である。住職退任後の理山がけっして無為に過ごしたのではないことは前記のように上首、助講師、副講師へと学僧の道を累進してゆくことからもうかがわれるし、より具体的には『理山日記』に書きとどめられている。この度新出の資料のいくつか⁽⁸⁾はこの時期の理山の宗義研鑽の跡を示すものである。こうした宗学の深まりとともに、「我門にあらざるもの」である景樹の思想はしだいにその重みを失っていったであろう。とはいえ、いつぼうで理山には次のような景樹追慕の歌がある。

十八日二王門通東寺町東側聞名寺にまうて、景
樹大人の墓前にて

本よりも君かをしへのなかりせは今の世に立事はおよはし
（『徳水余瀝』）

また理山は本山における和歌の地位を確立することに務めた。『理山日記』慶応元年には次のような記事がある。

夜 和歌御会 結衆 理山

兼題 関路時雨 馨英

落葉少 証海寺 善明

探題 予初雪 誠明

上賜酒食 後り 稲田大夫在席

退出可三更

（『理山日記』慶応元年十月一日）

「馨英」は文化九年（一八一二）生、明治八年没、近江国野洲郡比江村仏眼寺住職、本山講師、真達上人侍講、この年五十四歳である。「善明」は文化十一年生、明治十五年没、証海寺と称

し³⁹ 同国粟太郡中野村常念寺、後に京都高林庵住職、当時五十二歳である。この後明治十五年に本山副講師になつてゐる⁴⁰。次の第六節『東行日記』に見える「松山善明ぬし」である。「誠明」は未詳。「上」は門主真達上人、「稲田太夫」は家司稲田帯刀である。ちなみに理山はこの年六十七歳で本山副講師であつた。

これは出席者四人の小さな歌会であるが、場所が本山であること、門主から酒食が供されていること、家司が列席していることから見て、本山とは無関係に個人の趣味で開かれたものではない、出詠者四人のうち未詳の一人をのぞく三人が学僧であることから見て、和歌は佛光寺派の教説と矛盾し受け入れられないものではないことを示していると言つてよいのではないかと思ふ。想像をめぐらすなら、この歌会は一山に詠歌を勧めるための理山の企みの一つであつたのかもしれないが、それはともあれ、このような歌会が開かれるにいたるまでには理山の相当な努力があり、そして本山における和歌の地位を高めるための理山のこうした努力はこの後もつづくことが、『理山日記』からうかがわれる⁴¹。

良山に対しては「兎角我門にあらざるものハ害有もの也と心得べし」と断言できても、理山自身はそれほど単純明快に和歌や景樹を否定したわけではないのである。明治十年の入寂にいたるころまでの理山晩年の景樹観・景樹評価は、江戸から明治への変革そしてそれにもなう理山自身の境遇の変化、さらに理山身辺の事情がからまりあい、複雑な様相を呈していたはずである。なお、次の「『東行日記』」で理山の景樹評価について略述する。

第六節 『東行日記』

『東行日記』（仮題）は、二つ折りにした罫紙を六枚重ねて右上

隅を一個所紙縫で綴じた、縦二四・六糎、横一六・六糎ほどの旅日記で、筆者はその筆跡からあきらかに理山である。この中に景樹の名が二回、またおそらく景樹を意識していると思われる「今の香川」が一回出ている。

それらを抄出する前に、一つ解決しておきたい問題がある。東行したのは誰なのか、そしてなぜこのような旅日記が書かれたのか、という問題である。筆者は理山であるが、旅をしたのはいったい誰なのか、紛らわしいのである。

まず、巻頭には次のようにある。

明治七年二月三日の夜大津観岳ぬし 法主の御使にて
東行すとてやとられぬ松山善明ぬしハ西都より伴ひ来

つれとこよひハ河並にゆきてやとりぬおのれ曰豚兒良山

かねて東上のこゝろさし有ともゆかはやとて旅よそひ
す

「ともにゆかばや」とあるが、誰が行くのか、良山が大津観岳ぬし・松山善明ぬしともに行くのか、理山もともに行くのか、よくわからない。しかし、すぐつづいて、「四日。午前十二時や、と、なひて午後一時大津松山と共に三人旅立れたり。市田の里までおくりてかへりぬ」とある。これによれば、東行したのは良山であつて、理山は三人を「市田の里」まで送つてそこで引き返していることは明らかである。

ところが、読み進めてゆくと、理山自身の東行であつたかのよくな文言が続出する。たとえば後に引く「二」の冒頭の「てけよし。昨日一昨日のごとし。あた、かなり。とく出立て名護屋に至り光り名高き黄金のシヤチいづちゆきけん」と哀れなり⁴²、そしてその結びの「などおのがじ、かたりつ、ゆく。岡崎過て藤川にやどる」などは、旅をした本人の文章と考えるのがもっとも自然で

あろう。さらに(二)の「おそく出たつ。空曇り小雨ふる。(中略)新居の関の跡にて戸ぎ、ぬ御世とハ今也と互二よろめきおどり廻り舞阪にか、り浜松にやどる」、(三)の「こたびハ用のいそぎに尋ねもゆかず事済かへらん時こそと残しぬ」など、これだけを読むと理山自身が旅をしているとしか思えない。

もちろん、前記のように、「市田の里までおくりてかへりぬ」と明記されているのであるから、大津観岳、松山善明とともに東行したのは良山一人と考えるべきではある。しかし、右のような個所があるのもまた事実であるし、特に四日の段の結びに、「さて今夜ハ泊り醒ヶ井なるべしとおもひて良山にかはりてよめる先をおもひあとかへり見てこよひしもひとり寝もせぬ醒井の宿」とあるのにつづいて、「五日昨日けふいとあた、か也。とく出たつ。柏原今須をへて関ヶ原に至り、徳川の世をおもひ今をかなしびて、世は常なしとかたりなぐさむ」と五日の段がはじまって以後は、ほぼ一貫して旅行者の立場で記述されている⁽⁴²⁾。良山になりかわって記述している、ということではなく、河面藏人について「わが親しき友にしておなじく香川景樹の門に遊べり」とあるところに端的に表れているように、理山自身が旅行者であるかのような記述なのである。良山に代わって「先をおもひ」の歌を詠んだことによつて、そのまま理山自身が想像上の旅をはじめたかのような趣である。

このような旅日記が生まれた理由は、一つにはもちろん良山への愛情であろう。良山の身の上を思うことが良山と自己とを重ねることになったと考えられる。その上でもう一つ、この問題を考えるうえで重要な手がかりになると思われるのは、廃仏毀釈への批判が全編のうち大きい割合を占めているということである。理山は、この『東行日記』からも明瞭にうかがわれるのであるが、「神仏判然ハ維新の勅令也。皇国の教法ハ神仏の二ツにして教部省を置れたる処也」として、「神仏判然」のうえ神道・仏教がそ

れぞれの立場を守りながら共同して民を導くべきだと考えていたのである。二月三日に大津観岳が蓮光寺に到着して宿泊し、翌四日川並福応寺に宿泊した松山善明も合流し東京にむけて出発してから同十二日に品川に至るまでの間、回数としては六日の岡崎城址にかかわるところ、十日の箱根権現の神勅にかかわるところの二回のみであるが、量についてごく大まかにいうなら、全編の叙述一二四行(半丁一二行の罫紙五枚と六枚目四行)のうち、五三行はそうした意味での「廃仏毀釈」批判に費やされている⁽⁴³⁾。このように見ると、この冊子は良山の旅日記の体裁をとった理山の「廃仏毀釈」批判の書といつてもよいであろう。

さて、次の中から景樹の名が明記されている個所二箇所と、景樹を意識しているのではないかと思われる「今の香川」をその前後とともに抄出する。

(一)

六日てけよし昨日一昨日のことしあた、かなりとく出立て名護屋に至り光り名高き黄金のシヤチいつちゆきけんと哀れなり実に 皇国ハ

天神 天孫の治し鎮めましたる御国なるかな数代轄(所知) 拠の国城を捨て諸侯みな 皇命に帰順し玉へり 宮鳴海チリフを過て矢はきの橋にきて

矢をはくも御法をとくもへたてなき世中をわたる橋哉 岡崎の城いか、成けん此城の元ト一人たる河面重就ハ父のた、りを受て若きより浪々して西京に在しほとわか親しき友に

しておなじく香川景樹の門に遊へりかのいかなる時にや 天上非無月孤松妨我看の句有今や大教院創建の

始ハ神仏二道もて吾邦の教法を定められたるを偏党のもの 在て唯神たらんを望むものから吾真宗を分離せんとす ざるをまた神仏自然に任せず私議を存してわか五派の中

澁谷の一派を神に混せんとするものハ何事そや神仏判然ハ御一新の清規たり既に会津征討の折しも越後の人民官軍に従ふともち廢仏せられてたのみなししかず会津に随ひて死せんにはといふに 朝廷わか一山に勅し玉ひて神仏判然して在天の先皇の神靈を祭らしめ玉ふにて廢仏毀釈ハ更になしとの倫命有て漸く国人鎮撫せりこれ神仏相助けて人民を隨器開導応病与薬のをしへをなし玉ふに在り大丈夫の世にある炎をわけ刃をわたるも生てハ神明によりて勝をとり死してハ仏陀に托して悟をうる一心の方向定らは何事にかハ心を動かさむなとおのかし、かたりつ、ゆく岡崎過て藤川にやとる

*景樹にかかわるのは八行目から十一行目までの河面重就の経歴を記した部分であるが、ここではそれをふくむ六日(明治七年一月)の記事の全文を引いた。十五行目の「澁谷の一派をく神仏」までを写真3として後ろに掲げる。この前年の明治六年に廢城令により破却された岡崎城から元藩士河面重就に言い及び、その詩句「天上非無月孤松妨我看」(天上月無きに非ず孤松我が看るを妨ぐ)から明治七年当時の宗教政策、宗教界に筆を転ずる。大教院創設時の目的が「神仏二道」に基づいて教法を定めることであつたこと、しかるに神道の主導権を確立するために、大教院から真宗を排除しようという動きがあつたこと、さらに佛光寺派を真宗から切り離し神道に吸収しようという目論見があつたことなど、ここに記されていることがどこまで正確に事態をとらえているのか、もし見誤りがあるとすればその原因は何なのか、私にはわからない。が、少なくとも理山の認識によれば幕末維新期の混沌とした情勢の中で、「偏党」「私議」により佛光寺派は存亡の瀬戸際に立たされていたのである。

しかし、ここにあるのは維新政府の宗教政策に対する批判では

ない。「光り名高き黄金のシヤチいづちゆきけんと哀れなり」を直ちに「実に皇国ハ天神天孫の治し鎮めましたる御国なるかな。数代轉抛の国城を捨て諸侯みな皇命に帰順し玉へり」と受ける文脈に現れている理山の単純ではない心情に、そのことは予告されている。理山の憤懣の矛先は明治政府ではなく「偏党」「私議」に向けられ、「柏原今須をへて関ヶ原に至り、徳川の世をおもひ今をかなしびて、世は常なしとかたりなくさむ」といった懐古の情も、維新政府批判へは向かわなかつたのである。

景樹は右のような文脈の中で、単に河面重就との親しさをいうためだけに登場させられているように思われる。河面重就は後に言及する『東路日記』の池鯉鮒までを、またはその原型を記したという(註河野重就その人である。別名蔵人、「河面」は「川面」とも書き「カワヅラ」と読まれている。その伝のあまりはつきりしない人である。岡崎藩士であつたらしいことはすでに言われているところである(註)が、「此城の元ト一人」の「一人」とは「藩士の一人」といった意味で「元ト一人」とはつまり「元藩士」という意味であろう。「父のた、りを受けて若きより浪々して」については未詳である。

* (二)

七日おそく出たつ空曇り小雨ふる赤坂御油を過て白菅に至りむかし宣阿大人ハ富士見んとて二人三人を伴ひてこゝにて富士を見て 山々はまた明ぬよの雲の上にしろきを見れば雪のふしのねとよみて楽をハ極むへからすとてこゝより京にかへられたり 靈元上皇の一條西行とよはせ玉ふほとの人にて今の香川の先祖也 新居の関の跡にて戸さ、ぬ御世とハ今也と互二よろめきおとり廻り舞阪にかゝり浜松にやとる

*「今の香川」が景樹その人をさしているのではないことは明らかである。明治七年（一八七四）は景樹没後三十一年で、その後継者の景恒もすでに慶応元年（一八六五）に没し、香川家は景恒の長男で景樹には孫にあたる景敏がついでいる。しかし、景敏は文久元年（一八六一）生、明治二〇年（一八八七）に享年二十七で没している⁴⁶から、この年まだ十四歳であった。その存在がどこまで理山に意識されていたかどうかわかりにくく、かりに意識されていたとしても景樹の孫としてであって、このときの景敏は理山にとって一家を立てている歴とした歌人、といった存在ではなかったと思われる。宣阿の流れをくむ香川家はほかに景嗣の系統があつて、こちらは景嗣が慶応元年没し、その後は秀嶺さらに景信（明治二十一年没、三十七歳）、景三郎とつづいており⁴⁷、明治七年は秀嶺または景信の時代にあたる。この秀嶺または景信が理山にとって「今の香川」と意識されていたかどうか、まだしも景樹の孫である景敏の場合以上に疑わしい。「今の香川」は、現存の人物その人を指して「香川家の今の当主」といつている言葉なのではなく、「景樹の家系」といった意味の、やや曖昧な言葉なのではないかと思う。以上のように考えてここに掲げた。

〔三〕

八日空晴たり池田の里湯谷御前の旧跡いまハ行興寺とて
 墳有桜木のもとに母刀自の墓ハ建久五年四月三日湯谷のハ
 其並ひに同九年五月三日と有とそ文政の比ニハ景樹大人こゝに
 来て 花さくらいつれとまらぬよの中をしはしはかりと散おくれ
 けん
 とよまれたりこたひハ用のいそきに尋ねもゆかず事済かへらん
 時こそと残しぬ

*「湯谷御前」（湯屋御前）の墓についての記述は、「花さくら」

の歌もふくめて、文政元年、江戸からの帰京の旅の様を記した景樹の『中空日記』十一月十七日の次のような一節⁴⁸にもとづくものであろう。

さて池田のさと行興寺に、湯屋御前の塚ありといふ。昔の事もなつかしくてふりはへてまうづ。桜のかけに石塔二基あり。一つは其母とじのにて、此わたりすなはち長者が家の跡なりといふ。刀自のかたはらなる卒都婆に、建久五年四月三日と書きつけ、湯屋のは同じく九年五月三日とあり。さらばや地主の花見の頃のいたはりに、其母とじは身まかりて、ゆやの子もたゞ四年ばかりおくれでぞはかなくは成けん。かの花の宴に、なれしあづまの花や散るらむとながめて、心なきをも打つけに感ぜしめし、まことのいたはりはいふも更なり、一首の姿さへ世にたぐひなきをあはれと思ひ出て、

花さくらいつれとまらぬ世中をしはしはかりと散おくれけむ
 孝一、

たらちねを思ふねざしの深かりしまことの花は冬がれもせず

「文政の比ニハ景樹大人こゝに来て」とあるのは、その『中空日記』の旅の際のことである。それを受けて、「こたひハ用のいそぎに尋ねもゆかず事済かへらん時こそと残しぬ」とつづく行文からみると、理山自身の旅としか考えられないが、前述のように東行したのは実は良山であり、理山は同行していないことは前記のとおり明らかである。

問題は、この短い『東行日記』の中に、景樹は二度、「二」をふくめると三度も登場しているということである。景樹もかつて江戸に出ており、往路には『東路日記』、帰路には『中空日記』が残されている、ということがその理由の一つではあろう。（二）

はまさしくその『中空日記』を踏まえての行文であった。

しかしそれはそれとして、そのうえにもう一つの理由があったのではないと思う。明治四十一年一月、渡辺千秋・高崎正風・田中光顕・徳大寺実則が連名で出した「故肥後守従五位下香川景樹ニ御贈位請願書」の中に、景樹の贈位に値する業績を陳述して「暗々裡ニ維新鴻業ノ根蒂ヲ培養セリ」⁴⁹とある。景樹個人を称揚しなければならぬ種類の文章であるから、この文言も敷島の道を行くひとかどの歌人ならば誰にいつてもそう言えは言える、といった程度のことを言っているのではないであろう。景樹の所論には、特にそのように言いなすことのできる場所がおそらくあったのである。それが、この時期の理山に景樹を想起させる理由の一つだったのではないか、少なくともその可能性を探ってみてもいいのではないかと思う。

〔一〕において景樹は単に河面重就との親しさをいうためだけに登場させられているように思われると記したが、それだけではなかったのかもしれない。理山に、

奥山の谷底草のわれなるもつゆのめくみはそてもしと、に

という歌がある。大正二年に刊行された理山の詩歌集『徳水余瀝』に、「大講義を拝叙してよめる」という詞書を付けて収められているが、もとは『理山良山合帳』（仮題）の表紙に朱書されている歌である。この冊子は前半が理山の雑録、後半が良山の日記の二部からなっており、表紙見返しから第一丁表にかけて「神徳皇恩」と大書され、「大講義理山 時年七十八歳」という署名がある。その表紙に書き付けられているのがこの歌である。理山の書き物の中には、このように「権小講義」「大講義」など教部省の役職名が少なからず見え、教導職に挙げられたことを名誉とし喜び、時には誇っているように思われる。『丙子集』⁵⁰にみえる「明治

九年五月大講義を拝してしてよめる」と詞書する長歌の一節には次のようにもある。

いつよりか 御法の主に ます君に

侍読となりて そのうへに 猶おほやけの

御たからを をしふるつかさ おほけなく

大講義にそ 補せられし まづ人目には

御親の名 揚げるといはれ はんへらむ

されはそ孝の をはりとも いはれんものか

ところが、同じ理山に次のような歌もある。

人すれはわれもしてみる小猿かなあやまりなから筈をたまは
れ

「皇国々体」から「文明開化」まで、教部省教導職として説くべき十七の題目⁵¹についての経説をかきとめた『十七題草稿』の後表紙に朱書された狂歌である。理山が大講義に任じられたのは明治九年五月であるから、『十七題草稿』の「維新明治九年七月 大講義三津理山」という奥書によればこれは「奥山の」の歌や右の長歌と同じころの詠作ということになる。人まねをして褒美に叩頭しながら筈（小銭）をもらう小猿は、世の成り行きに随って道を説く理山自身の戯画化された姿でもあったのではないかと思う。

維新後教部省教導職として、真宗の僧徒、学僧でありながら「敬神愛国」「天人人道」「皇上奉戴」といういわゆる「三条教則」（三条教憲）を説かねばならない立場にあった理山が、そうした葛藤のなかで、後に「暗々裡ニ維新鴻業ノ根蒂ヲ培養セリ」とたたえられることになる景樹を思いおこすこともあったのではなからう

か。理山が聞名寺の景樹墓前で、「本よりも君がをしへのなかりせば今の世に立事はおよばじ」と詠んだのは何時のことでのよいうな事情があったのか未詳であるが、「今の世」とは明治の世のことであり、「立つ」とは神道主導の宗教界で何とか生き延びていることを言っているのではないか、という想像は、確たる根拠はないけれど一つの可能性として考えておいてもいいのではないかと思うのである。

〔付記〕

蓮光寺所蔵資料の閲覧につき蓮光寺現住三津孝昭氏のご厚意を、また福応寺所蔵資料の閲覧につき福応寺現住京極博義氏のご厚意を賜った。記して深謝する。なお、本稿は平成二十二年度科学研究費補助金C(2)「浄土真宗と和歌」による研究成果の一部分である。

注

- (1) 蓮光寺歴代住職の系譜。蓮光寺所蔵「永代祥月経名簿」の巻末から記されている。十五代良山の得度までが理山筆である。
- (2) 「蓮」の左下に「一」とあるべきであるが、もとのまま引いた。「起」の左下にもレ点はない。
- (3) 『近江人物志』：滋賀県教育会編・刊、大正六年一月（臨川書店復刻 昭和六一年一〇月）
『近江神崎郡志稿』：大橋金造編、滋賀県神崎郡教育会、昭和三年一月
『五個荘町史』第二巻：五個荘町史編さん委員会編、五個荘町役場刊、平成六年三月
ほかに、『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』（佛光寺学匠寮編、真宗佛光寺派宗務所、平成一〇年一月）、『国書人名辞典』第四卷（市古貞次ほか編、岩波書店、一九九八年一月）などに略伝がある。
- (4) 蓮光寺所蔵『万曆家内年鑑』書き入れほか。この書き入れについては拙稿『理山日記』の香川景樹（本誌第六卷第三号 平成二二年三月）の注2に略述した。蓮光寺所蔵『万曆家内年鑑』文化十二年正月序の

刊本に理山以下歴代の住職が書き入れたもので、理山大講義就任までが理山自身による書き入れと推定される。

- (5) 『万曆家内鑑』書き入れほか。
- (6) 右の引用文中に引かれている「羨君随意度春風」の詩もその一つである。この詩は、蓮光寺所蔵の理山詩稿のうち、表紙に「草稿 謹乞正斧 竺謙拜」とある一冊に「端月十八日襲三樹子春兒留別韻」として、また『荒堂詩稿』に「端月十八日襲三樹頼兒留別之韻」として見える。「老僧小閣坐春風」の詩は両書ともその後ろに小字で「原詩云」として付記されており、前者では第三句五文字目は「僻」となっている。また第三句一字目が後者では「慚」のようであるが判読できない。
- (7) 後述のように、備忘録、雑録の中に日記をふくむ体のものであるが、かりに「日記」と呼ぶ。
- (8) 前稿第二節（一一八）（一一九）参照。
- (9) 常楽寺恵岳は香川景樹「歌日記」（彌富濱雄編「桂園遺稿」上巻・下巻、明治四〇年三月・八月）に類出する景樹の知友である。その伝、景樹との交遊等については、拙稿「柏原正寿尼と常楽寺恵岳―桂園派形成の一事例」（平成一六年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書「桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏」平成二〇年五月）に記した。
- (10) 景樹「歌日記」文化四年四月二十一日に次のようにある。「副応寺」は元のままである。
淡海なる河並の副応寺博聞師此頃学ひことなり給へるか故郷へ帰るとて暇申に來給ひてやかく別れるはかひなしなとよみいて給へるをみてかたはらにかきつく
- (11) 福応寺所蔵「安養山福応寺記録」による。
布施雅男「三津理山「徳水余瀝」周辺」（『歴史研究』第一五七号 新人物往来社 一九七四年二月）に、文政四年三月に理山が景樹に入門したことを言い、つづいて、「この年、同じ佛光寺派の南五箇荘村川並にある福応寺京極博聞が遷化しているが、長子博因は香川景樹の門人である。」と記されている。ただし、門人であったと判断される根拠は掲げられていない。
- (13) 表紙、巻首に「日記」以外の語が用いられているのは、天保十年の巻首の「日新録」（表紙は「日記」、元治元年巻首の「日録」（表紙は「日

- 記)のみで、そのほかはすべて「日記」とある。
- (14) 青山霞村編『桂園秘稿』(からすき社 昭和五年三月) 同『香川景恒遺稿』(からすき社、昭和一〇年一月)
- (15) 『香川景恒遺稿』における括りでは「嘉永二年八月」のところに収められているが、その中に「弘化二年私廻日記中」「弘化二年」のように早い時期の歌もまじっている。
- (16) 理山の歌は、『徳水余瀝』のほか日記のところどころにかきとめられたものと、蓮光寺所蔵短冊によって知られる。ほかに新出の蓮光寺所蔵資料に外題『丙子集』という理山の明治八(乙亥)、九(丙子)年頃の歌百九首(うち長歌一首、消去一首、他人詠四首。そのほか漢詩一編)を集めた小部の歌集が一冊あるが、これらのなかにここに掲げた歌は見られない。
- (17) 『理山日記』天保三年二月三十日(前稿第二章(五八))の「鎌倉太良」が景恒である可能性がある。また、同じく『理山日記』天保四年三月三日の「大人長男及女子等」の「長男」は景恒であろう。また小稿第二章第一節紹介済み日記十六冊補遺(一)安政元年(一八五四)五月十一日の「香川」も景恒かもしれない。「景周」「景恒」は『理山日記』にみえない。
- (18) 拙稿「仏光寺『御日記』の香川景樹―天保十四年から嘉永四年まで―」
「桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏」(注9)
- (19) 彦根市立図書館所蔵本では「廬」に「フセ」とふりがながある。「名家伝記資料集成」は「田廬庵」とする。
- (20) 景樹にかかわって登場するのは前稿第二章(二七)(三〇)(五三)の三回である。
- (21) <http://www.geocities.jp/kawanokyouisitu/Souka.htm>
- (22) 理山著『田緒書』に、門徒の呼び方について記したところがあり、その中に手紙の宛名の書き方の実例として、市田伴右衛門、市田源左衛門などの場合が取り上げられており(前稿の「三、蓮光寺所蔵資料の香川景樹」(二)、『田緒書』の(三))、これらの人々を「理山日記」にも蓮光寺八日講に属する「源左衛門」「伴右衛門」として登場しているが、「彦根歌人伝寿巻」によれば、市田義輔(天保九年時四十一歳)は通称伴右衛門0313、市田義親(天保九年時四十五歳)は通称源左衛門0313である。もともと、「彦根歌人伝寿巻」の「市田某妻」の項に、「某」の名は藤七であり、「当家之市田八当所市田一統ノ家筋トハ異ナリ」とあるところによれば、同じく北町屋村の市田であっても同族ではない場合もある。しかし、『理山日記』によれば蓮光寺十四日講に属する北町屋村在住の次郎兵衛法名浄源の次男を藤七といった。市田某がこの藤七であるとしたら、こちらの市田家もやはり蓮光寺門下だったのである。以上、芋丈が北町屋村の人であったかどうか未確認であるが、その可能性もあるので記しておく。
- (23) 『香川景恒遺稿』文久三年。濁点はもとのままである。
- (24) 『大阪教育大学紀要』第四二巻第二号 一九九四年二月 大阪教育大学リポジトリ <http://rih.osaka-kyoiku.ac.jp/8080>
- (25) 小野恭靖氏前掲論文による。
- (26) 『歌日記』では第三句が「嬉しさは」となっている。前稿注(19)参照とある。ほかに、「第六番」○の中に「二」が各一冊、また二十冊に「十五」「三十三」「五十」など数字のみが一から断続して六十三まである。
- (28) 「円山、君」は未詳である。円山は京都の地名の円山で、君は源阿弥の主、または設計者、棟梁など建築の主導者であろうか。高野興善も同じく未詳。「名家伝記資料集成」に「高野興喜」とある人かもしれない。
- (29) 鷲尾順敬編『国文東方仏教叢書 法語部』(東方書院 大正一六年一月)。(一)内は割り注。
- (30) 石田充之・千葉乗隆編『真宗史料集成 第一巻』(同朋舎メディアプラン 昭和四九年一〇月)
- (31) 『万曆家内年鑑』書き入れについては注(4)参照、佛光寺『御日記』については、注(9)の「桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏」(平成二〇年五月)のうち、「仏光寺『御日記』の香川景樹―文化六年まで―」第二節に記した。
- (32) 国文学研究資料館「地下家伝・芳賀人名辞典データベース」。
- (33) 「仏光寺『御日記』の香川景樹―文政六年から八年まで、文政十年から天保十三年まで―」第三節(三三)参照。
- (34) 『万曆家内年鑑』書き入れ、「当院住持職相続」による。
- (35) 『理山日記』天保三年六月一日。前稿第二章に(四七)として抄出した。
- (36) 『理山日記』天保三年六月十五日。前稿第二章(四九)。

- (37) 『理山日記』天保三年五月十一日。前稿(三九)～(四二)。「理山日記」によれば、佛光寺派は前年の寺社奉行脇坂中務大輔安董からの仰せ渡しに基づいて宗門の「御法則」を改めたのであるが、五月十日薄暮、「遠近僧俗」を呼び登らせて、門主随念上人の御前でその「御法則」の読み聞かせが催された。これには理山も出席し請書を提出している。ところがその翌日の「講者弁釈」(講者再弁)を欠席した。この日の午後、理山は景樹の樵木町の寓居観鷲亭を訪問し、大和・伊勢・尾張等を遊歴して着京したばかりの熊谷直好、伊勢津島神社宮司水室長翁などとの話で時を過し、結局宿に帰らなかつた。そして翌朝、観鷲亭で景樹と話中に、親類で門主近習の清水将曹から、「昨日講者再弁之節出席無きに依り殿中穩やかならず」と知らされたのである。
- (38) 『元治甲子銷夏録』(元治元年)、『辛丑銷夏録』(天保十二年)、『信巻両重問答』(天保十五年)、『改悔文聞書』(天保十四年)、『大経付属文聴書』(天保十四年)、『観經玄義分講説』(天保十二年)、『護法論科解』(嘉永六年)、『二深草考』(天保十二年)ほか。なお、小稿冒頭あたりに引用した『近江人物志』には「著はず所」として、「入出二門偈録」・『大経和讃録』・『二河譬文略弁』・『玄義十四行偈略解』・『教義十七題略解』が挙げられているが、未見である。この度の新出資料にこれらと外題・内題が一致するものもふくまれていない。
- (39) 住持する寺院の名と名乗りとが異なる場合があることは、拙稿「柏原正寿尼と常楽寺恵岳―桂園派形成の一事例―」第七節「恵岳の伝記資料」『桂園派の形成・展開と真宗仏光寺派交流圏』平成二〇年五月(注9)に記した。
- (40) 佛光寺学匠寮編『佛光寺学匠寮の伝灯と史料』(真宗佛光寺派宗務所 平成一〇年四月)による。ただし、常念寺住職であったことは、本山佛光寺所蔵『真宗佛光寺派末寺名帳』による。
- (41) 理山の本山佛光寺における和歌にかかわる活動については、拙稿「佛光寺と和歌」(金龍静編『佛光寺の歴史と文化』平楽寺書店 平成二三年刊行予定)に概略を記した。
- (42) 唯一の例外は八日の、「見附の駅にて いさや子らわれたにも見ぬふしのねをおもひきやとや打向ふらん」である。「見附にて」は旅行者としての記述であるが、「いさや子ら」は残された者が旅行者を思ふ歌である。
- (43) 五三行のうち一五行が(一)として引いた部分のうち「今や大教院創建の始ハ」(二行目)から「おのがじ、かたりつ、ゆく」(最終行)までである。もう一つの箱根権現の段が三八行であるが、加えて三行分ほどの加筆がある。左にその前半十六行を引く。改行は原本と異なる。終わりから三行目の「敬神のおもひ弥深く愛国の念いよく重く」は、後に述べる「三条教則」の「敬神愛国」を意識した文言であろう。十日雨ふりいとひや、か也原沼津三嶋をへて箱根にのほる権現の宮にまうす関東総鎮守の額をか、けていとかうくし少しおかみて箱根の神二心なく一すしに弥陀たのめよの御言よさしかこハむかしわか祖師聖人帰洛のとき夜もすてに暁更に及て月もはや孤嶺に傾て折しも此險阻にか、り玉ふ二た、今わか尊敬を致すへき客人此道を通り玉ふへき事有必慇懃に響応申へしと巫に告させ玉ふこ、に巫示現また覚やらぬに貴僧影向し玉へり何そた、人にましません神勅これ炳然也とてさまく、に珍珠をと、のへあるししたりと宸翰の伝文に見えたりこは億兆の民生に此師の弘むる法に信順せよとの神勅なるへしこの神は鏡早日尊にして早く神去玉へとも不死の神霊はいちしろく青人草を幸し玉へし伊豆の神は瓊々杵尊にましますよし此豊葦原の元君なり吾等天祖天孫の御霊のふゆを蒙り衣食乏しからす此皇国に生育し此仏法にあへるを喜ひ敬神のおもひ弥深く愛国の念いよく重く感涙と、めかたし行路難もわすれつ、あへきくも念仏して下りぬ
- (44) 『東路日記』は随行した菅沼斐雄の著したものであるが、二月二十三日の「池鯉鮒」の段の後ろに、「これまでは重就がしるしたる日記のま、を書つくとある。
- (45) 兼清正徳「熊谷直好伝―封建末期の一歌人の生涯―」(熊谷直好伝刊行会 昭和四〇年五月)、森繁夫編・中野莊次補訂『名家伝記資料集成』第一巻(思文閣出版 昭和五九年三月)。井上通泰「熊谷直好」『南天莊棟筆』春陽堂昭和五年二月の「付録」。「追記」に重就の履歴についての記述がある。「追記」に、大正四年七月の「南天莊月報」に「河面重就」という一文を書いたとあるが未見である。
- (46) 『名家伝記資料集成』ほか。
- (47) 兼清正徳「香川景樹」吉川弘文館人物叢書 昭和四十八年七月)による。
- (48) 引用は、佐々木信綱編『香川景樹翁全集』上巻(博文館 明治三一年六月)により、一部表記を改めた。

- (49) 国立公文書館所蔵。引用は国立公文書館マイクロフィルムによる。
- (50) 『丙子集』については注(16)に略記した。
- (51) 皇国々体、道不可変、制可隨時、皇政一新、人異禽獸、万国交際、富国強兵、不可不教、不可不学、国法民法、律法沿革、租税賦役、產物制物、政体各種、役心役形、權利義務、文明開化の十七題目である。

(二〇一一年一月一九日受付、一月二七日受理)

写真1 『白隠和尚施行歌』



写真2 『遊心閣遺訓』

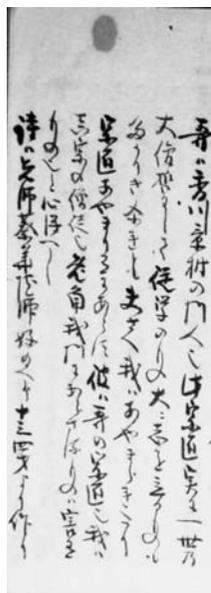


写真3 『東行日記』

